

# 清水門跡の石垣

## 石垣修理工事に伴う現地説明から

### 1 清水門跡石垣の概要

清水門(しみずもん)跡は、特別史跡姫路城跡の北西部に位置し、江戸時代には中曲輪から船場(せんば)川を越えて西側の城外へと通じる出入り口です。内門と外門に守られた枡形という形式になっていました。池田時代(17世紀初頭)の「播州姫路城図」(岡山大学附属図書館蔵)にはすでに出入り口が描かれています。ただ、絵図の描写からは、枡形の石垣は本多時代以後に築かれた可能性があります。特に今回の修理対象のうち、南端の石垣は池田時代の絵図では北部内堀へと続く堀の一部となっており、本多時代以後に北勢隠門(きたせがくしもん)の土橋設置にあわせて築かれた可能性が高いと思われます。



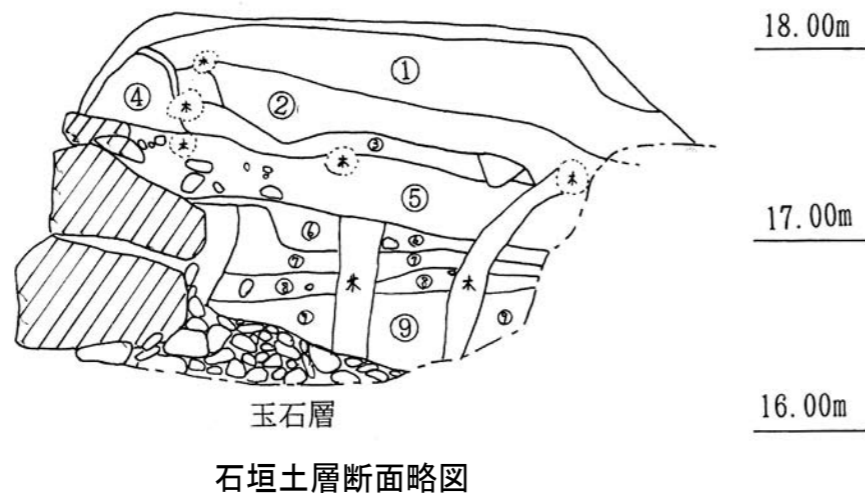
昭和63(1988)年には枡形内の発掘調査が実施され、門の礎石や排水溝、「鷺の清水」と推定される大型の石組井戸が確認されました。平成2(1990)年にも石垣上の内門部分の発掘が行われ、櫓門のもとと推定される2時期の礎石や、東側石垣の石の階段、土塀の残りなどが検出されています。

### 2 石垣上の樹木伐採

石垣上に生えていたアベマキの根により石垣に孕みが生じたため、木の伐採を行いました。伐採した木は、樹齢は約95年で大正2(1913)年頃に生えたものです。この時期まで、石垣上の土塀が失われ、鳥などが運んできた種が芽を出したものと思われる。

### 3 石垣調査と修理

清水門石垣では、これまで石垣への刻印は見つかっていませんでしたが、今回、北西の角において傘形の刻印を発見しました。これは姫路城内では類例が無く、その意味の解明が今後の課題です。その他、石垣の石材を割るための矢穴を観察したところ、矢穴を開ける際の基準として刻まれた可能性のある刻線なども確認しました。



### ①石垣解体(○内番号は、図の土層断面図の番号)

南西角では樹木撤去後に石垣の解体を行いました。裏込めは玉石を主に使用していましたが、その中にやや大きな凝灰岩割石の混入が見られました。また、石積み中には本来算木積に使用するような加工石材が観察されるなど、築造以後に改築が行われた可能性が推定できます。

また、絵図から増築が想定された、上から約40cmの盛土①②③は、近代以後の整地に伴うもののようです。ただ、盛土西端の黄橙色土の塊④は、崩れた土塀土が堆積したものかもしれません。

石垣裏込めは、天端に近い上層で江戸時代の馬踏面層⑤の下に砂礫層⑥⑧と粒子の細かい土を叩き締めた層⑦⑨を交互に盛り、その下から玉石を栗石としていました。これは石垣裏側へ雨水などが浸透するのを防止するためのものと考えられます。石垣の改築時に施工されたと見られます。

### ②間詰石補充

間詰石については残存している間詰石の状況から、玉石を主にし、要所には凝灰岩の割石を用いていたと推定されます。今回は市川流域産の玉石と竜山石の割石を使用して間詰石の補充修理を行います。

城郭研究室では、これらの石垣を長期修理計画に基づきながら、世界遺産としての価値を保つために石垣の保存修理を行っていきます。

